



2000年9月20日

Letter for Members

日本補綴歯科学会 Japan Prosthodontic Society

<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jpds/>

発行人 田中久敏

編集 広報委員会

事務局 〒170 0003 東京都豊島区駒込1 43 9 (財)口腔保健協会

TEL 03 3947 8891 FAX 03 3947 8341

コンテンツ

学会の意識改革と問題点を考える	1	口腔外科学会，保存学会との合同会議	5
21世紀への飛翔「第104回日本補綴歯科学会学術大会」	2	学際的視野に立つ日本補綴歯科学会を目指す	6
「国際シンポジウム大阪2000」への期待!!	3	用語集発刊間近!	7
日本学術会議会員に推挙されて	4	PCSPに参加して	8
学会改名問題のその後	5	ニュース，レポート	3, 6, 8

学会の意識改革と補綴学研究に関わる問題点を考える

学会の意識改革の必要性について，また補綴学の専門性が危ぶまれている状況において，本学会は何をなすべきなのか，田中久敏会長にお話を伺った。

『今，何ゆえ本学会員の意識改革が必要なのでしょうか?』

近年の医学の進歩は目覚ましく，分子生物学や遺伝子解析による病因・病態の解明，画像診断の進歩，新薬開発などの恩恵を国民が受けた結果，わが国は世界一の長寿国になった。一方，歯科疾患においては，低年齢層でウ蝕，歯周病の抑制効果を認めるものの，高齢者では依然その罹患率は高く，また抜歯の頻度も高い。このことは，補綴教育・臨床研究の存在価値を再考する要因となり，皮肉にも「補綴（学）」はOscar Wildeの提言にみられる“the price of everything and the value of nothing”の言葉を真剣に受け止めなければならない現状が存在するような気がする。

『歯科における補綴学の専門性と社会におけるその認識が危ぶまれる現状についてはどうなのでしょう?』

日本補綴歯科学会は歯科界において，戦前，戦後を通じてめざましく活動し，発展してきたにもかかわらず，今日の専門性が歯科一般に位置付けられるのでは情けない。

歯科界や歯科補綴の分野においてこそ，歯科補綴（学）を知らずんば歯科医師にあらずといった風潮は通用したかもしれないが，それでは社会性に欠けている。そこで標榜名「補綴」の改名によって，社会にその存在価値を高めようとの試みもされてきたが，大学院大学構想に伴った大学改革によって，歯科補綴学の名称そのものが消失し，補綴学の存在価値は希薄になってきた。反面，高度な研究はある意味で推進されるかもしれないが，補綴臨床からかけ離れてしまうことが危惧される。改名はしたけれども内容が変わらねば同じである。今一度，歯科補綴学は臨床治療学（臨床科学）であることを認識して教育・研究の新しい試みを高める必要がある。

本学会は第100回記念大会で過去を反省し，未来に向けて発展を期した。以来，早や2年の歳月が流れたが本学会はどれほど改変されたであろうか？ 歯科または歯科補綴学の殻にはまった枠の中だけの思考（仲良しクラブ的）で学会運営が継続されるのであれば将来はない。学会内外における活動を第三者的機関によって評価される正常なピアレビュー方式を採択し，教育，研究，臨床の成果を正当評価してもらうことが必要となろう。

☞ **結局，必要なのは自己反省と外部評価。さて，それをどう具現化するか？ 会長の手腕を期待しましょう!**

Letter for Members

21世紀への飛翔「第104回日本補綴歯科学会学術大会」

「今、まさに歯科補綴学とは何かをもう一度考え直す時期に来ている。補綴（学）を知らずんば、歯科医師ではないといった風潮はもはや通用しなくなった。そこで、21世紀に向けて、学会としての方向性を確立し、国民および歯科界にむけて、新たな提言を行う必要がある。」という田中久敏会長の所信を踏まえて、今世紀最後の日本補綴歯科学会学術大会が2000年11月10日（金）、11日（土）に、「大阪国際会議場（グランキューブ大阪）」において開催される。

会場となる国際会議場は、21世紀の国際交流・情報受発信の中核基地として、古来より人と物と情報の交流の舞台であった大阪中之島に新しく建設された最新機能・多目的の施設で、交通アクセスも至便なところである。

「演題が178題を越え、史上最多」という本学術大会の川添堯彬大会長に、今大会の魅力、特徴などについてお尋ねした。

第1の特徴は、メインテーマを「加齢に伴う口腔環境の変化と補綴学的対応」と掲げたことである。時代と社会は21世紀を待たずして高齢社会を迎え、まさに長寿者の健康と医療が重大な問題となっている。歯科補綴学領域にとっても、この問題は大きな関心事であり、その対応は大きな責務の一つである。なお、時を同じくして、ボストン・ハーバード大学医学部においても、「国際シンポジウム加齢と健康」が開催されることになっている。そこで本学術大会では、このメインテーマに沿った3本のシンポジウム、特別講演、招待講演、課題講演、研究教育研修を企画した。

シンポジウムは、1.「加齢による口腔機能の変化はどこにどのように現れるか」、2.「加齢を考慮に入れた補綴治療のための検査・診断」、3.「成人患者と高齢患者の補綴学的対応（治療方針）の違いを探る」を企画した。また、特別講演は、「古代人の顎・歯に学ぶ口腔機能の大切さ

日本人の顎や歯はどのように変化してきたのか」と題し、京都大学霊長類研究所の茂原信生教授が、招待講演は、「Implants in different indications for the aging and aged patients：A 20-year follow-up」のテーマでオーストリア・グラッツ大学補綴学の準教授のDr. Wegscheiderが予定されている。さらに、研究教育研修では「ティッシュエンジニアリング」のテーマを取り上げている。

第2の特徴は、臨床的テーマを多く取り上げたことであり、臨床家、非会員にとっても見逃せない機会である。また、学生、コワーカーの参加も大歓迎とのことである。

第3の特徴は、「国際シンポジウム大阪2000」の併催である。「第104回大会」の翌12日（日）には、「Beyond 2000：Prosthodontics In The New Millennium」をメインテーマとし、「Principles and Management Strategies of Prosthodontics Beyond 2000」、「Advanced Esthetics for Prosthodontics in the New Millennium」、「Learn More in Prosthodontics in One Day」の3テーマが企画されている。

第4の特徴は、「認定医申請・更新のため単位」が倍増して獲得できることである。すなわち、「第104回大会」への出席で4単位が、「国際シンポジウム大阪2000」では4単位が、両方の参加で合計8単位が得られることである。

第5の特徴は、アジア諸国での本学会に対する関心が高く、中国、韓国、台湾からの多数参加者が予定されていることである。

さらに今回は、広い展示会場を確保し、多くの企業の参加を得た。また、会場をポスター会場および休憩場と同じフロアに設定したことによって、ゆっくりと見る事ができるであろう。そして最後に、「大きく変わり行く大阪の昼と夜の文化・街を楽しんでいただきたい」と結ばれた。

☞ いずれも興味ある企画が盛りだくさん！ 学会員ならびに開業しておられる非会員の諸先生方のご参加をお待ち申し上げます。

「国際シンポジウム大阪2000」への期待!!

日本補綴歯科学会が総力をあげて初めて試みる「国際シンポジウム大阪2000」が「第104回大会」に引き続き、翌日11月12日(日曜日)、同じ大阪国際会議場で開催される。「すでに学術プログラムが確定し、抄録集も完成間近であり、参加申し込み者には配付される準備も万全であり、あとは多数の参加者を待つのみ」ということで、国際シンポジウム組織委員会にその主旨、見どころ、聞きどころを尋ねてみた。

このシンポジウムの最大のねらいは、「変革の時を迎え、その進路を模索している歯科補綴学と補綴臨床の現在を世界的視野でしっかり見つけ、問題点を正確に捉え、その解決の方策を考えること。さらには21世紀に進む道を、世界のリーダーたちと共に考えること。」であるという。さらに、見どころ、聞きどころに関しては、「若い会員にはすばらしいプレゼントが用意されている。それは、補綴臨床のグローバルスタンダードとは何かということが、クラウン・ブリッジ、パーシャルデンチャー、コンプリートデンチャーごとにプログラムされており、その神髄をたった一日で学べるコースを企画している。そしてそれらは大変に美しいクリニカルケースで表現される。」とのことである。

組織委員会はさらにアピールを続け、「ここに参加することで、スキルアップは間違いなし。このミレニアムを飾るにふさわしいシンポジウム、エキサイティングな8時間

をぜひ一緒に分かち合いませんか。われわれ会員だけが、歯科補綴学と補綴臨床の未来に責任を持っているのです。6000名全員の参加を強く期待しています。大阪でお待ちしています。」とのコメントを頂いた。

☞ **このような最先端臨床と補綴学的戦略がちりばめられたシンポジウム、詳しいプログラムは、学会誌(44巻4号)、または同封のファーストサーキュラーをご参照あれ!!**



☞ ニュース ACP学会との交流開始へ!

本年6月シアトルで開かれたパシフィックコースト補綴学会(Pacific Coast Society of Prosthodontists)の学術大会で、田中会長がアメリカ補綴専門医学会(American College of Prosthodontists、以下ACPと略す)の会長Dr. Arthur Nimmoと会い、両学会の交流を促進することで合意しました。その第一歩として、田中会長はACP会長に対して、日本補綴歯科学会の有志がACPの学術大会(2000年11月15日~18日、ハワイ島・ヒルトンワイコロアビレッジ)に参加を希望した場合にそれを許可してほしい旨の要請を行い、ACP側はそれに答える形で、各教授に学会のサーキュラーを送ってきました。関心のある方は是非大会に参加され、交流を深めていただくことを希望します。

問い合わせ先: 国際渉外委員長 赤川安正

(TEL: 082-257-5675, FAX: 082-257-5679, e-mail: akagawa@hiroshima-u.ac.jp)

☞ **アメリカ補綴専門医とわれわれ学会員の交流の場となる11月のハワイでお会いしましょう!**

Letter for Members

日本学術会議会員に推挙されて

日本歯科大学歯学部歯科補綴学教室第一講座

小林 義典

このたび、第18期の日本学術会議会員の選挙に際し、日本補綴歯科学会、日本顎口腔機能学会、ならびに日本口腔健康医学会のご推薦および格別のご支援をいただき、まことにありがとうございました。お蔭様で、第7部の歯科学の咬合学領域の会員に推挙されました。ここに、日本補綴歯科学会の会員の皆様へ心からお礼申し上げます。

日本学術会議における私の役割は、歯科学、特に咬合学の将来のための具体的な活動で先鋒を勤めることであると認識しております。浅学菲才の身ではありますが、咬合学の発展に精一杯努力させていただき所存ですので、どうか日本補綴歯科学会の会員の皆様の一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

日本学術会議は、わが国の科学者の内外に対する代表機関として、科学の向上、発達を図り、行政、産業、ならびに国民生活に科学を反映、浸透させることを目的として、昭和24年（1949年）に日本学術会議法により、内閣総理大臣の所轄の下に設立された特別の機関です。全国約70万人の科学者の代表として選出された210人の会員で組織されており、会員の任期は3年です。本年7月から、第18期ということになります。活動は、独立して、科学に関する重要事項を審議し、その実現を図り、また科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させることを職務としています。さらに、政府からの諮問に応じて答申し、進んで政府に対して勧告する権限もっています。国際的にも、国際学術団体への加入、世界各地で開催される学術上重要な国際会議への代表派遣、二国間の学術交流のための代表団の派遣およびわが国において開催される重要な学術関係国際会議の共同主催、後援なども行います。

会の構成は、人文科学部門（第1～3部）と自然科学部

門（第4～7部）で、両部門から各1名の副会長、全体から会長1名が選出されます。今総会では、第17期に続いて東京大学総長を経て現在放送大学学長である吉川弘之氏が会長に選出されました。総会、部会、連合部会、運営審議会、常置・臨時委員会、研究連絡委員会がそれぞれ組織されており、これらのうち、常置委員会は、今期から第1～7委員会が組織・制度、学術と社会、学術の在り方、学術体制、学術基盤情報、国際協力の6委員会に再編されました。これは、さまざまな課題が待ち受ける21世紀を迎えるにあたり、その組織と活動について自主的に点検・評価を行った自己改革の一環であります。第18期も、学術研究の新しい様式、学術と社会の新しい関係の構築への胎動を伴って、学術研究の自由と主体性を尊重しつつ、現代社会で生起する複雑かつ多面的な問題を予見し、探知して、社会に対して行動規範を提供するという新たな学術的課題に向けて、積極的な役割を果たすことで合意が得られました。

私が所属する第7部は、生理科学4名、病理科学5名、診療科学13名、社会医学5名、歯科学3名、薬科学3名の合計33名の会員で構成されております。歯科学は、齶蝕・歯周病学で堀内 博・東北大学名誉教授、口腔機能学で内田安信・東京医科大学名誉教授がそれぞれ選出されておりますが、21世紀の高齢社会で重要な役割を担わなければならない第7部で歯科学の会員数が1割未満であることは、きわめて残念であるといわざるをえません。国からの予算、制度、会員の選出方法などの種々な問題がありますが、咬合学領域に登録している日本補綴歯科学会をはじめ、合計15学会と連絡を密にし、咬合学が21世紀の科学として活動、進展できるよう提言かつ行動していきたいと考えております。具体的には、まずはじめに制度の公正化、科学研究費の適正配分、歯科学、特に咬合学の重要性のアピールを推進させていただきたいと考えております。

【印】小林先生、ご寄稿ありがとうございました。ご活躍をお祈り申し上げます。

学会改名問題のその後

さてどうなってしまったのだろうか。「早急かつ真摯に結論を出す必要」があった日本補綴歯科学会改名問題は、その後、まるで何もなかったかのように経緯している。しかし、ガイドライン作成委員会（平成10年5月）ではかなり詳細に検討していた様子が伺える。すなわち、「補綴」は難解、診療科名は国民にわかりやすいほうがよい、21世紀に向けた新しい方向性も含む用語がよい、全国歯科大学学長会議教授要綱改訂委員会案や認定（専門医）制度に関する諸事情を無視しえないなどの理由から、タイミングを失わないよう変更する方向で検討すると結論に達している。そして、学長会議で提案された「整形歯科学」に対しては、いくつかの理由から受け入れ難いとの結論に達し、(a) 咬合治療（学，科）、(b) 咬合再建（学，科）、(c) 咬合・咀嚼（場合によっては“そしゃく”と表現）（学，科）の3案が考えられた。ところが、これらの委員会案は同年5月に行われた評議員会では改名に賛成あり、反対ありの議論百出でまとまらず、結局、前会長が委員長となって「学会名、教科名、標榜科名の変更に関する小委員会」が設立され、そこで討議されることになった。

この小委員会は3回開催されたが、議事要旨をみる限り、また振り出しに戻ったかのごとく意見の一致をみず、かえって問題の困難さを浮き彫りにした感がある。しかし、このような補綴歯科学会の混迷を横目に、歯科医療に対する社会的ニーズの変化、ならびに国立大学大学院重点化構想に伴って口腔医学の学問体系は積極的に変革が進んでいる。そこでは「補綴学」の名称は一掃され、「口腔機能学」、「口腔機能再建・材料学」、「顎口腔機能再建学」、「口腔機能修復学」、「口腔機能再構築学系摂食機能保存学」、「口腔機能再構築学系摂食機能回復学」などが、各大学独自の設定基準で決定されている。さらに、診療科名も一般の人から理解されないと理由から、「義歯外来」のような単純な名称に変更されつつある。こうした情勢のなか、それでも日本補綴歯科学会は名称をそのまま継続していくつもりなのか、それとも適切な呼称に変更していくのか、いまこそ「早急かつ真摯に結論を出す必要」はないのだろうか？

口腔外科学会、保存学会との合同会議

日本口腔外科学会、日本歯科保存学会と本学会の3学会で開催されている合同会議について、田中久敏会長に取材した。

(1) その会議はいつごろから始まったのでしょうか？

歯科学を代表する3学会から、歯科および歯科医療に関する諸問題に対して、学会サイドで新たな提言をし、行動するため、平成12年3月3日、斉藤 毅・日本歯科医学会長を交え、3学会合同会議を正式に発足させた。

現在までに3回の協議がなされた。

(2) 合同会議の主な目的は何でしょう？

その目的は補綴歯科学会の殻にこもることなく、学際的視野に立った整合性のある意見を統集合して教育、研究、医療、および専門医などに関わる諸問題の解決に向けて検討を行っている。今日までの単独学会による、学会のための行動をより幅の広い視野から解決策を見いだすこととした。

(3) 現在のメンバーをご紹介下さい。

日本口腔外科学会の瀬戸理事長、日本歯科保存学会の岩久会長および日本補綴歯科学会会長の私を中心として意見交換がなされている。今後は各学会の各種委員会との連携を保ちながら諸問題について協議が行われる予定である。

(4) 今、協議されていることで、最も重要な議題は何でしょう？

現在は、緊急課題として教育（国試問題を含む）問題の検討がなされており、近く結論が得られる予定である。

(5) 歯科医学会における位置付けや今後の活動はどうなのでしょう？

日本歯科医学会とも連携を保ちながら、今後はより社会性を伴ったビジョンと新たな指針を呈示してゆく所存である。

Letter for Members

学際的視野に立つ日本補綴歯科学会を目指す

本学会では、このたび、「臨時会員制度」の導入を決定しました。これは、本学会非会員が学術大会においては演者以外の共同発表者に、また、誌上発表においては筆頭著者以外の共著者になることができるという制度です。もちろん、1件の発表あるいは1編の論文につき定められた金額の学会への納入が必要です。これによって、歯科補綴学以外の専門分野の研究者との共同研究がさらに進展し、今まで以上に広い視点にたって歯科補綴学をみることができるようになると思われます。

ご承知のとおり、この8月から、新しい投稿規定のもとに編集作業が行われています。改訂の要点は補綴誌44巻3号の「巻頭言」に掲載されているとおりですが、査読者を固定したことに加えて、理工学、生理学、病理学などを専門とする他学会の研究者を査読者に加えたことをご存じでしたか。昨今、「Impact Factor」、「Evidence Based」、「Global Standard」などの言葉を良く耳にします。今回の改訂によって、補綴誌のさらなるグレードアップが期待されます。

昨年秋、今年春、秋の学術大会におけるシンポジウムをみてみましょう。名古屋では、リハビリテーション科医を加えた「咀嚼・嚥下障害」と、ペリオの専門家を加えた「補綴治療のための歯周組織の診査・診断」、大宮では、形成外科医と口腔外科医とともに討論した「顎顔面の整容」と、耳鼻咽喉科医と食品関係の専門家とともに考えた「味覚」、そして大阪では、「ティッシュエンジニアリング」が予定されています。まさに、「学際的視野に立った学術大会」といえるでしょう。

以上のごとく、田中会長の下、本学会の学際化はどんどん進んでいます。「学際」とは、2つ以上の科学の境界領

域にあること、いくつかの分野にまたがり関連することを意味していますが、“interdisciplinary”の訳語として、「国際」になって昭和40年代に造られた語であるとされています。また、最近では、いろいろの分野で“borderless”との言葉も頻繁に使われています。

わが日本補綴歯科学会の活動は、会則・第2条に謳われているように、「健康科学の向上、健康福祉の向上」を最大の目的としています。先の「100回記念大会」でも「健康科学としての歯科補綴学」とテーマを定め、21世紀のそれを展望しました。一方、今年から向こう11年間にわたって展開されることになった「健康日本21」では、「健康寿命」を延伸させることなどを目標に、個人の力と社会の力を合わせて、国民の健康づくりを総合的に推進する」とされています。まさに、わが学会の活動目的と合致する基本理念です。

「健康」は現代人の最大の関心事であるとされています。また、健康がQOLの基本であるともいわれています。今、健康を考えると、「精神と身体の相互関係の解明」が不可欠であると考えます。いわゆる「ストレス社会」に生きている人々の疾病は医学的のみならず、社会的にも解明すべき重要な問題であるといえます。ここに、「学際的協力」、「学際的研究」が必要となります。すなわち、「人文・社会科学系と基礎・自然科学系との融合」です。そして、そこから得られた研究結果を如何に臨床にフィードバックするかを考えなければなりません。

本学会における「臨時会員制度の導入」、「投稿規定の改訂」、「学術大会におけるシンポジウム」はすべて、21世紀に向かっての「健康科学としての歯科補綴学」の確立を目指すことに繋がっていると考えられます。わが学会のますますの発展が期待されます。

☑ ニュース 大山喬史氏 次々期会長候補副会長に選出される

本学会の次々期会長候補副会長を選出するための選挙が、評議員230名を選挙人として、本年6月から8月にかけて3回にわたって行われ、東京医科歯科大学の大山喬史氏が選出されました。

用語集発刊間近！

ご承知のごとく、本学会は用語検討委員会を中心として補綴専門用語の検討を行ってきている。その開始は昭和59年であり、幾多の先人の膨大なエネルギーが注がれてきた。

田中久敏会長のもと、用語検討委員会(田中貴信委員長)は、小林義典前会長の時に開始された作業を継続しているが、今、「定義あるいは解説と英語を併記した歯科補綴専門用語集」を完成させつつある。そこで、田中委員長に、この用語集について、話を聞いた。

まず、その意図について、「これまでの経緯とわれわれを取り巻く昨今の社会環境を考慮して、今こそ専門学会としての責任の下に編纂され、実用性をも兼ね備えた専門用語集が必要であると考え、この機会に、あるいは性急に、またあるいは強引に、われわれなりに具体的な一つの形を提示して、今後はそれを骨子として本学会の用語集を順次充実させていくことが最良であろうと判断した。」とのことである。なお、田中会長も同意見であることはいうまでもないが、いよいよ、われわれ会員が切望していた「実用性のある用語集」の発行が実現し、「日本補綴歯科学会の公式見解としての用語」が広く世に公表されることになる。

その編纂作業の大筋については、「1)用語の整理：過去に発行された本学会用語集のすべての用語は約3,000語であるが、これらのなかから、一般用語、解剖学用語、保存・矯正学用語等と多くの材料関係用語は、それぞれの専門学会の責任において管理されるべきものとして、これらを除き、誤解なく専門知識を伝達できる専門用語を選択した。結果として、本用語集には主項目として719語を採用したが、現在は専門用語整理の移行期であることを考慮して、これまでのすべての用語を索引欄に掲載することにした。2)評議員のアンケート調査による同義語の整理：比較的多数の専門家の支持を得た用語がそれぞれ最も正当な用語として、時間の経過とともに自然に定着するものと判断した。なお、アンケートの調査結果については、一覧表として巻末に提示することにした。3)定義あるいは解説文と

英語の付記：数十名の評議員に執筆願った原稿をもとに、現在最も妥当と思われる定義、あるいはその臨床的意義などに関する解説文を付記した。英語表記に関しても、幾多の表現のなかから、最も適当と思われるものを選択した。なお、その意味合いに諸説があるもの(例えば「中心位」)などについては、解説文に項目番号を付けて併記することにした。」とのことである。

最後に、田中委員長は、「古くからいわれるように、言葉は生き物であり、基本的に日々変化する可能性を含んでいる。すなわち、いかなる用語集も辞書も辞典も、まさに発行の日から内容の見直しを迫られる宿命を負うことになる。用語検討委員会の作業に終わりはない。とは申せ、当面この用語集の価値が広く認識され、今後の編集委員会等における用語規制に関する基盤となること、加えて、より公的な教授要綱や国家試験の出題基準に関する基本資料ともなることを願っている。」と結んだ。

ここに、原稿の一部を掲載させていただく。

【番号】：1

【用語】：アーライン

【英語】：Ah-line

【定義】：口蓋の可動部と不動部との境界を示す部分。「Ah(アー)」と発音すると、口蓋帆張筋に続き口蓋帆挙筋が収縮するために軟口蓋は挙上する。発音を中止すると、これらは元に戻るが、アーラインはこの運動時における可動部の最近心端を示していることから、上顎の義歯床後縁を設定するための基準として利用される。

【番号】：719

【用語】：ワンピースキャスト法

【英語】：one-piece cast method

【定義】：複雑な形態の補綴物を1回の鑄造によって製作する方法。一塊として鑄造されるため強度に優れるが、鑄造収縮の影響が大きく、適合性に問題が生ずる場合がある。金属床、クラスプ、保持装置などを1種類の金属で製作する場合、また、数歯にわたるブリッジを1種類の金属で製作する場合などに有効である。

Letter for Members

日本補綴歯科学会とJoint Meetingを行った「Pacific Coast Society of Prosthodontists」の学会に参加して

会長 田中 久敏

本年度より、Pacific Coast Society of Prosthodontists (PCSP)と日本補綴歯科学会は交友関係結び、合同学会が6月28日～7月1日までSeattle Washington Four Season Hotelで開催された。このことは、小林義典前会長と私の数年にわたる努力の結果であると自負している。日本補綴歯科学会からはポスター発表12題と口演発表1題が採択され、発表された。日本補綴歯科学会代表として会長の私、国際渉外委員会の小宮山彌太郎先生ほか、多数の参加があった。

PCSPは1930年に設立され、アメリカ合衆国でも最も古い歴史をもつ学会で、JPDのSponsoring Organizationの主軸として活躍している。名誉会員41名、正会員59名、準会員26名、総数126名で構成されたclosedな学会である。入会資格の基準が厳しく、大学関係を含め、そのほとんどが補綴専門医で占められている。したがって、推薦されれば誰でも入会できる学会ではない。会員になるためには、会員の推薦にもとづく学会発表が必要である。そして、資格審査会(プレビュー)がその2回の発表を評価し、その結果の判断により、準会員の資格が与えられる。当然のことながら、一定の学歴と研究施設での補綴(学)のトレーニングを受けた者で、補綴専門医の有資格者、補綴専門医取得者などが前提となる。したがって、開業医といえども、補綴医としての資格を充たす学力と実力が要求される。準会員になった数年後の学会発表と誌上発表が義務付けられており、最終的には、資格審査会にて「会員」として登録

される。なお、会員はguestを紹介することができるため、毎年の学会にはclosed会員プラスguest会員の数百人の参加者がある。

今回は3日間で招待講座が28題あり、日本補綴歯科学会代表として小宮山彌太郎先生が「Intentionally Inclined Installation of Fixture : A Substitute for Sinus Floor Elevation」と題して講演され、好評を博した。

また、日本補綴歯科学会からはposter sessionとして12題が採択され、3日間にわたって発表された。Poster sessionは早朝の7:30～8:00、10:30～11:00、1:00～1:30の3回に分けて質疑応答がなされ、不慣れた英語、場所と雰囲気各発表者も汗をかいていた。

日本補綴歯科学会と比較して、PCSPでの口演発表は「The補綴学」の究極および最先端歯科医療を目指している。IADR方式の学会に慣れた日本補綴歯科学会員にはなじめない雰囲気であったのかもしれない。今後、欧米諸国の補綴学会と共通の場を求めることで、日本補綴歯科学会のあり方を再考するための良い機会となるであろう。なお、今回のポスター発表の採択に関しては、本学会国際渉外委員会委員長 赤川安正教授とPCSP側の担当者との間で、約100回にわたるE-mailのやりとりがなされた。赤川教授のご苦勞に対し、深く感謝の意を表します。



レポート「第3回認定医研修会」大成功裡に終了

さる6月11日(日)、大宮市において開催された「第3回認定医研修会」は、多数の参加者を得て成功裡に終了した。会場は、補綴臨床を学ぼうとする認定医のみならず、これから認定医を申請しようとする会員で立錐の余地もなく、熱気に溢れていた。また、地域の開業医の先生方にとっても、臨床を勉強するまたとない良い機会であった。今後の「認定医研修プログラム」が大いに期待される。

学会へのご意見・ご要望をお寄せください

〒061-0293 北海道石狩郡当別町字金沢1757
北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座
日本補綴歯科学会広報委員会

委員長：平井 敏博

委員：沖本 公繪 小林 博 田中 昌博
虫本 栄子 安田 登

幹事：石島 勉

Tel & Fax : 01332-3-1425

E-mail : kohojpgs@hoku-iryo-u.ac.jp